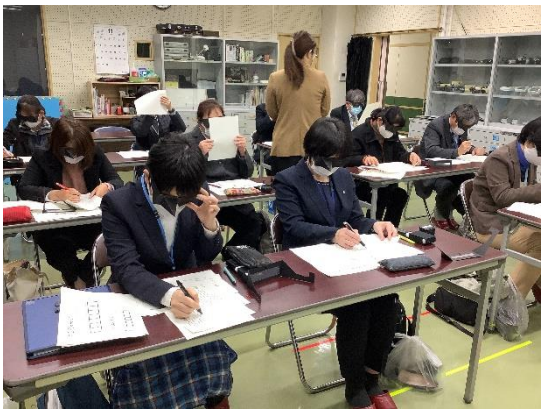
11 月 26 日（金）に第 2 回熊本県弱視教育担当者ネットワーク会を実施しました。

今回は小・中・高等学校から１３人の先生方の申し込みがありました。

午後からの日程で、講話・演習・情報交換会を行いました。

弱視シミュレーション体験

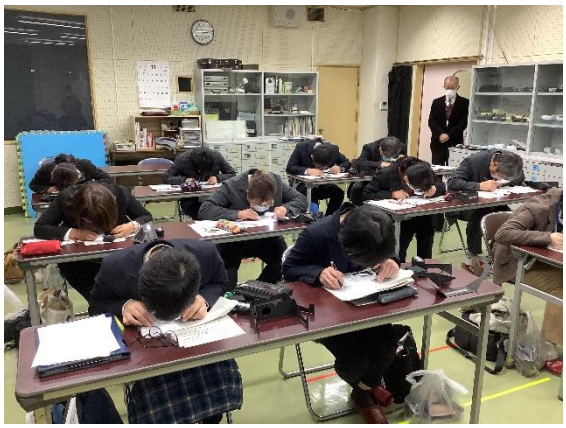
弱視シミュレーション体験



今年度、弱視学級を担当される先生方は初めての方が多く、第１回ネットワーク会で行うはずだった（コロナの感染拡大防止のため Web 上での研修になったため未実施だった）弱視シミュレーション体験を行いました。今回は、白濁と視野狭窄の見え方についてシミュレーションレンズをはめて、国語や視写、算数の計算、迷路などの課題に取り組んでもらいました。白濁の体験では、文字が大きく、濃く印刷されていると見やすいこと、また、文字を書くマスの大きさや線の太さについても、同様だということを実感していただきました。一方、視野狭窄では、拡大してある大きな迷路と縮小してある小さい迷路をしてもらうと、縮小してある迷路の方が、大きい迷路より、早くゴールに到着されていました。「小さい迷路の方が行き先の把握できるから進みやすかった。」と感想を述べられていました。視野が狭い場合は、見えている範囲に情報がたくさん入っているほうが読み進めるのにも効率が良いため、拡大ではなく、縮小した方が見やすい場合もあることや、

弱視だからといって、何でも大きく拡大すれば良いのではなく、担当している生徒の見え方の実態をしっかり把握して、教材などを準備することの必要性に気づかれていました。

自立活動の指導例の紹介と指導のポイント



単眼鏡・ルーペ指導

弱視児童生徒の自立活動の具体的な例を、本校の継続的学習支援の様子をご紹介しながら、乳幼児・小学校低学年・高学年/中学校の３つの発達段階に分けて説明しました。乳幼児段階では遊び中心の幼児期から学習が始まる児童期に向けて培っておく必要がある「よくみて理解する力」「手で操作する力」「書く力」等を向上させるための活動を紹介しました。小学校低学年では、視覚補助具・弱視レンズの使い方の練習について「弱視レンズ訓練プログラム」を参考に紹介しました。自分から使ってみたくなるしかけや、楽しみながら取り組める課題を準備するために、目の前の児童生徒の見え方の実態や興味関心の把握をし、その上で、教材研究を行うことの重要性をお伝えしました。高学年・中学生では、弱視レンズの使い方の練習に加え、漢字の指導や読みの指導、技能教科に関しては、事前学習の必要性などにも触れました。また、将来を見据えて自分の見え方を知ることや自分の視覚管理についても考えていくことが必要になることもお話ししました。これらの活動を自立活動で行っていくためには、先生と子どもの信頼関係を築き、弱視児童生徒の気持ちに寄り添いながらすすめることが基本になることなどを含め、

担任としての役割と使命についてもお話ししました。

情報交換会

　後半は小学校グループと中・高グループに分かれて情報交換会を行い、日頃抱えている疑問や悩みなどを先生方同士で共有し、意見・情報交換を行いました。本校の進路指導部からは視覚障がい者の進路に関する情報提供や進路学習会の案内がありました。

参加者の感想

・弱視シミュレーション体験では、実際の見え方が体験でき、これまでの教材を再度見直す機会となりました。

・見え方の体験を通して、一時的にですが、見え方に困難さのある子どもの理解につながる研修となりました。

・情報交換会では、どの学校の先生方も悩んでおられることが多く、自分だけではないと共感した。これを機に進路に向けて支援していきたいと思います。

・研修会に参加させていただき、本当に良かったです。担任している児童や保護者の方も、もちろん私も手探りの状況でいるので、今回の研修を参考に、これから色々考えていきたいと思います。実態把握とコミュニケーションを密にとり、その子がよりよく生きていけるような支援ができるようになりたいです。

などの声が聞かれました。ご参加ありがとうございました。

●次年度も年２回（6 月・11 月）の開催を予定しています。たくさんのご参加お待ちしております。